チューリッヒ大学附属病院留学報告

歯科口腔外科　内田文彦

2015 年 10 月~12 月の 3 ヶ月間、附属病院若手医師等海外派遣事業にて、スイス連邦のチューリッヒ大学附属病院の口腔顎顔面外科に留学させて頂きました。スイス連邦の物価は世界一高いとも言われています。さらにスイス連邦の最大の都市であるチューリッヒは物価の高い都市ランキングでも世界のトップ 5 に入ります。2015 年の世界のビッグマック指数を見てみると、スイスが 1 位で、ビッグマック 1 個当たりの価格は日本円にして 845 円です（日本は 39 位で 370 円）。言語についてですが、スイス連邦には公用語が 4 つあります。ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語です。スイス国内であっても、ドイツ語が苦手なフランス語圏の人とフランス語が苦手なドイツ語圏の人が話をする際は英語でやりとりをすることもあり、ここはどこなんだと違和感を覚えることもあるとのことでした。チューリッヒはドイツ語圏ですので、日常会話やカンファランスはドイツ語で行われました。また、チューリッヒ大学の正面にはチューリッヒ連邦工科大学があり、日本からの留学生の方とも知り合いになることができました。

私の今回の渡航の目的の一つは、唇顎口蓋裂に対する治療を学ぶことでした。唇顎口蓋裂に対しては、術前に顎矯正を行うこと、哺乳障害改善を図ること、また、舌が鼻腔に入り込む癖を抑えて舌機能の正常化を図ることを目的とした術前顎矯正装置が使用されています。この装置は、日本ではホッツ床と呼ばれていますが、チューリッヒ大学の Hotz らが世界で初めて使用するようになったものです。当院では、我々歯科口腔外科でこのホッツ床を作製、調整していますが、チューリッヒ大学では、歯科矯正医がその役割を担っていました。また、日本では、顎顔面外傷の治療は口腔外科および形成外科で行われていますが、欧州では口腔顎顔面外科にてほぼ全例行われています。そして、毎日顎顔面骨折の整復固定手術が行われており、その症例数の多さにも驚きました。骨折の整復に対しては、術中にナビゲーションシステムを使用して、その復位状態を確認していました。このような Computer Assisted Surgery（CAS）は欧米では顎顔面領域にも適用されており、近年その有用性について多くの報告がなされています。CAS は Preoperative planning，Intraoperative navigation，Postoperative control に分けられますが，日本で行われているのは

Preoperative planning がほとんどであり、本当の意味での CAS はほとんど普及していないものと思います。顎矯正手術においては、術前にシミュレーションソフト上で上下顎骨の骨切り位置とその移動量を決定し、骨固定するプレートも pre-bending ではなく、pre-manufactured で patient-specific な治療が行われていました。口腔がん症例では、再建後の咬合状態を術前にシミュレーションしており、顎骨の切除後の即時再建の際に、術中に移植骨（腓骨）にインプラントを埋入した状態で再建を行っていました。

また、スイス口腔顎顔面外科学会にも参加してきました。発表は、フランス語、ドイツ語、英語で行われており、質疑応答もそれぞれの言語で行われておりました。スイス人の語学の堪能さには驚かされます。そして、12 月中旬には、AO の本拠地 Davos で開催された AOCMF Principle Course に参加してきました。Course は、基本的な骨折治療の概念から始まり、下顎骨、中顔面骨折の治療、顎変形症、さらには再建外科にまで及び、いずれも AO の膨大な臨床データや研究に基づいて体系的に整理されたものであり、そこに臨床第一線で活躍する講師陣の経験を織り交ぜた大変興味深い内容でありました。

週末には、世界遺産となっているベルン旧市街やザンクト・ガレン修道院、スイスアルプス、ラヴォー地区の葡萄畑、ベルニナエクスプレスと周辺景観をチューリッヒから日帰りで観光することもできました。そして、クリスマス休暇時期には、ドイツまで足を運び本場のクリスマスマーケットを散策することもできました。

レジデントに日本の印象を聞いたところ、日本に興味がない人はいませんでした。しかし、日本への留学は考えないのかと質問すると、「英語が通じないし、日本語は話すのが難しいから、日本への留学は考えない。」との答えが返ってきたのが残念でした。2020 年には東京オリンピックも控えており、今後は日本国内にいてもますます英語を話す必要性が増えることと思います。教育現場や医療現場、ひいては日常生活において、英語をコニケーションツールとして用いることが普遍的になれば、日本への留学を希望する人も増え、より日本の素晴らしさを世界に発信できるものと思いました。

最後に、武川教授および歯科口腔外科スタッフおよびレジデントの皆様、渡航にあたって様々なサポートをして頂きました国際連携室の皆様に心より感謝申しあげます。